

令和 2 年 6 月 17 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K12135

研究課題名(和文) 周産期の非医療的支援提供方法の開発と評価：参加型介入研究

研究課題名(英文) Development and evaluation of a training program on non-medical perinatal support

研究代表者

福澤 利江子(岸利江子)(Fukuzawa, Rieko)

筑波大学・医学医療系・助教

研究者番号：20332942

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：周産期の非医療的支援のトレーニング方法を開発し実施した。産科ケアの受け手や支援者が、かわりて困難を感じた事例を集め、67名より97件の事例が寄せられた。時期ドゥーラ要素に分類・分析し、各事例をもとにロールプレイ教材を作成した。最終年度に国内5回、国外(モンゴル)2回のトレーニングを実施した。これは、産科ケアの現場を疑似演技するもので、失敗しても妊産婦さんを傷つけることのない安全な場所で、妊産婦や家族、医療者などの役を演じ、その時の気持ちなどをふり返るもので、経験や知識を問わず誰でも参加できる。今後、チャイルドリサーチネット内「ドゥーラ研究室」などで実施概要を公表する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ドゥーラサポートは、その効果が強力なエビデンスによって保証されている割に、費用や収入の問題、産科に非医療職のドゥーラが入りにくい現状、日本でのドゥーラの実例が少ないため関心はあっても導入を躊躇してしまうことなどが原因で、実社会で普及しにくい現状がある。本研究の結果、少なくとも日本では今後、ドゥーラを職業としてではなく「概念(コンセプト)」として強調するという結論に至った。この方針には国際的に新規性があり、「ドゥーラ的な人」が社会に増えやすくなれば社会的意義が大きい。

研究成果の概要(英文)：A training program on non-medical perinatal support was developed and implemented. Data were collected from mothers, their family members, and health care providers and other caregivers. A total of 67 participants provided 97 cases on difficult interpersonal experiences and situations during perinatal care. Data were analyzed, according to timing and component of non-medical support (i.e., informational, advocacy, practical, and emotional). Based on the cases collected, role play scenarios were developed for role-play session. During the final year, five events in Japan and two events in Mongolia were organized to implement the training program with role-play sessions. Role-play allows trainees to experience mock situation on perinatal care without hurting women, by playing roles of pregnant women, family members, and providers. Anyone can participate regardless of their knowledge or skills as non-medical caregiver. Reflection was emphasized to maximize the training effectiveness.

研究分野：助産学

キーワード：非医療的支援 妊娠 出産 産後 ドゥーラ ロールプレイ 教材開発

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

## 1. 研究開始当初の背景

世界保健機構(WHO)は2014年に、出産中の母子の生命の安全にとどまらず、女性への敬意と尊厳に満ちたケアの重要性について声明を出した。「産科医療の整備」と「心のこもった周産期ケア」の両立が、2030年のSDGs評価に向けた周産期ケアの国際的課題の要といえる。また、ルーティンケアの見直し、即ち「エビデンスに基づく医療」の重要性も、特に周産期医療の分野でコクラン共同計画を初め国際的に推進されている。

少子高齢化社会を迎えた日本においても、周産期ケアの量と質の維持は喫緊の課題である。日本は近代化に伴い、世界的に優れた周産期死亡率を達成し、格差の少ない社会を維持した。しかし近年は、2006年に「出産難民」という言葉が知られ、産科医療制度の脆弱化と共に格差拡大が社会問題になった。少子化と産科医・助産師不足等により産科施設閉鎖が全国的に続いており、産科医療の集約化が特に地方で進んでいる。産科施設の健診や分娩の場では、初対面の担当者が、忙しく、交代で妊産婦とその家族にかかわるため、ケアが分業的・画一的・表面的になりやすい。本研究者の過去の研究より、日本では、特に助産師が、「妊産婦に寄り添うこと」「情緒的支援」に価値を重くおき実践に努めている一方、人手不足や多忙、医療者であるため、妊産婦の非医療的ケアのニーズを思うように充足できない現状に、無力感や問題意識を抱えていることが確認された。

ガイドラインが発達しやすい医学に比べ、情緒的・社会的支援は標準化されにくく、施設や提供者によって質や量に幅がある傾向は国際的に共通である。母子の生命の安全のため産科医療の保持は最優先事項であるが、同時に、親身で個別的な継続ケアが求められる妊娠・出産の非医療的ケアの提供が今後いっそう難しくなる可能性が高いと予測されるため、新たな対策が求められる。そこで本研究では「ドゥーラ(doula)」という概念を使用する。ドゥーラとは古いギリシア語で「他の女性を助ける経験豊かな女性」を意味し、周産期にある女性とその家族のための非医療的で継続的な支援を指す。具体的には、妊娠中～産後の女性に1対1で寄り添い、主に出産時に付き添う。血圧測定、内診、分娩介助などの医療行為は行わない。1980年代以来、多くのRCTが行われた結果、コクランレビューでも安産の増加や母乳育児率増加など、多岐にわたる効果が実証され「すべての産婦に継続的な寄り添いが必要」とドゥーラサポートの有用性が強調されている。海外では1990年代以来、先進国を中心にドゥーラが新たな職業としても発達し、DONA(Doulas of North America) Internationalなどの養成組織も多い。海外の科学的・実践的な知識を、日本の出産ケアの向上に役立てる可能性の検討は、学術的・社会的な意義がある。

日本では近年、産褥期・育児期のケアが発達し、産後ドゥーラ他、様々な非専門職支援者養成が進んでいる。しかし出産中のケアについては、従来どおり産科医・助産師・産科看護師などの医療者が担う。夫の分娩立ち会いは増加しても、家族などの非医療者は、主な支援者とみなされにくい。本来、産後の状態は妊娠、出産の影響が大きく、産後の問題は出産以前の介入により部分的に予防することが可能である。妊娠・出産は、本来は疾患ではなく正常・生理的なプロセスであり、適切なトレーニングを受けていれば、非医療者が周産期ケアの一部を有効に担うことは可能だが、研究開始当初、日本では特に分娩期のケアについてそのようなシステムは発達していなかった。

## 2. 研究の目的

海外の「ドゥーラ」の概念を日本で応用する最も適切な方法について科学的知識を探求することを本研究の目的とした。具体的には、周産期ケアの当事者(周産期ケア提供者と、ケアの受け手である妊産婦とその家族)と共に、非医療的ケアの提供について最も効果的で持続可能な方法を考案し、実施および評価を参加的行った。

## 3. 研究の方法

### (1)文献検討

周産期の非医療的支援に関連する国内外の研究論文やニュース、ウェブサイトなどより最新の情報を検索しアップデートした。また、本研究で使用した研究方法論についても文献を収集し学習した。

### (2)専門家パネル

周産期の非医療的支援の実施状況、促進要因、阻害要因、支援者の養成方法等について、国内外の専門家とディスカッションをおこなった。

### (3)質問紙調査

事前調査として、平成28年9月と平成30年3月に国内(東京および名古屋)で開催された米国式の出産ドゥーラ養成ワークショップ計3回(主催:ドゥーラシップジャパン、日本福祉大学)の各回にあわせて参加者アンケート調査「周産期の非医療的支援者「出産ドゥーラ」:養成プログラム受講者の思い」を実施した。

本調査として、平成30年12月～令和元年3月までの期間に、後の教育プログラムで使うロールプレイ教材を参加型アプローチで作成するために、ウェブアンケート調査「産科ケアでかかわりに困難を感じる場面:ロールプレシナリオ教材の作成」を実施した。

いずれも研究計画書は筑波大学の医の倫理委員会の審査を経て実施した。

### (4)ロールプレイ教材の開発

上記の本調査で得られた事例をもとにしたロールプレイ教材を作成した。一部は英語にも翻訳した。

## (5)ドゥーラ養成プログラムの実施

国内外で、開発したロールプレイプログラムを試用した。第1部に各テーマに精通したゲストスピーカーによる講演を、第2部で研究データをもとに作成したロールプレイシナリオを用いたロールプレイ演習を実施した。

## 4. 研究成果

### (1)研究の主な成果

#### ①文献検討および情報収集、事前調査

平成28年度には、日本における出産時の継続的な寄り添いの提供者について文献検討をおこなった。国内外の文献を収集し、様々なモデルについて情報を集めたり、海外のエキスパートと話し合った。平成28年度より、ドゥーラサポートの効果についてのコクランレビュー「Continuous support for women during labor」の更新版の著者チームに加わり、最新の研究知見を海外の研究者と、国際保健における出産時の非医療的支援の意義について討議したことも本研究に役立った。この更新版レビューは平成29年7月に出版された。また、コクランレビューの方法論についてワークショップを受講して方法論を学んだ。

平成28年9月と平成30年3月に国内(東京および名古屋)で開催された米国式の出産ドゥーラ養成ワークショップ計3回(主催:ドゥーラシップジャパン、日本福祉大学)の各回にあわせておこなった参加者アンケート調査「周産期の非医療的支援者「出産ドゥーラ」:養成プログラム受講者の思い」から得られたデータ(回答計39名、回答率75%)をまとめた。ワークショップの評価は全体的にとっても高く、文化的な違いはそれほど大きくなかった。米国で実際に活動しているドゥーラから直接学ぶ機会や、出産時のケアやコミュニケーションについて演習が充実していたことなどの評価が高かった。米国式を日本に導入する際に求められる文化的改変の工夫の方法についても示唆が得られた。

平成29年度は、12月にモンゴル国立医科大学でドゥーラについての2日間のワークショップ「Doula workshop: The Perinatal doula's practice and contribution to modern Maternity care and current situations and challenges in Mongolian maternity care」が開催され、モンゴルにおけるドゥーラサポート導入についても話し合うことで日本とモンゴルの社会文化的特徴やプログラムの効果的な導入方法についても検討が進んだ。

平成29年度2~3月にはアメリカ式出産ドゥーラ養成プログラムが国内で開催され、28年度のデータ収集と同じ方法で追加のデータを得ることができた(タイトル:「周産期の非医療的支援者「出産ドゥーラ」:養成プログラム受講者の思い」)。

#### ②教材開発

本研究の中心的な調査として、ケアの受け手あるいは支援者が、妊娠中・出産中・産後のかかわりで困難を感じた事例を集めるために、平成30年12月~令和元年3月までの期間に、後の教育プログラムで使うロールプレイ教材を参加型アプローチで作成するために、ウェブアンケート調査「産科ケアでかわりに困難を感じる場面:ロールプレイシナリオ教材の作成」を実施し、国内の産科支援者および出産経験者計54名(医療者19名、医療者以外の支援者2名、妊産婦本人33名)から回答を得た。67名より97件の事例が集まった。これらを時期(妊娠期15%・分娩期34%・産褥期24%・授乳15%・全期13%)と、コクランレビューにより抽出された4タイプのドゥーラ要素(情報提供、アドボカシー、実質的、情緒的)に分類して分析した。その後、各事例をもとにしたロールプレイ教材を作成した。

#### ③トレーニングプログラムの実施

最終年度は、前年度までに得られた知見をもとに、周産期の非医療的支援のトレーニング方法を開発し、実施した。2019年7月~2020年1月の期間に国内で6回(下記)実施した。第1部に各テーマに精通したゲストスピーカーによる講演を、第2部で研究データをもとに作成したロールプレイシナリオを用いたロールプレイ演習を実施した。参加者は各回20-70名ほどで、満足度も高かった。

- ◆ 「日本に出産ドゥーラをつくるには」 2020年7月1日(月)15:15-18:00 会場:筑波大学医学キャンパス 講師:飯村ブレット様(米国在住 チャイルドバースエドゥケーター)
- ◆ 「日本に出産ドゥーラをつくるには:海外の動向を学ぶ&ロールプレイ演習」 2020年7月2日(火)13:00-15:30 会場:筑波大学東京キャンパス 講師:木村章鼓様(フランス在住 出産ドゥーラ) 共催:一般社団法人ドゥーラシップジャパン
- ◆ 「日本に出産ドゥーラをつくるには:海外の動向を学ぶ&ロールプレイ演習」 2020年7月28日(日)13:30-16:00 会場:愛知県名古屋市 ウィルあいち 講師:木村章鼓様(フランス在住 出産ドゥーラ) 共催:一般社団法人ドゥーラシップジャパン、レキップフェミニン
- ◆ 「助産師の役割と限界:妊産婦自身の力を引き出すために必要なこと」 2020年12月28日(日)13:30-16:00 会場:三重県津市 国際保健医療学会学術大会2019 学生部会
- ◆ 「産科アロマセラピストから学ぶ院内出産ドゥーラの実践」 2020年1月21日(火)13:00-16:30 会場:筑波大学東京キャンパス 講師:原田香様(前田産婦人科 アロマセラピスト) 特別協力:前田産婦人科、界外亜由美様(マザーリング)
- ◆ 「帝王切開の当事者の思いを知り、ロールプレイで寄り添いを学ぶ」 2020年1月25日(土)13:00-17:00 会場:筑波大学東京キャンパス 講師:細田恭子様(帝王切開カウンセラー) 特別協力:界外亜由美様(マザーリング)、片野あすか様(日本医科大学多摩永山病院)

上記の他、当初の計画外で、国外(モンゴル ウランバートル)でもワークショップを2回実施した。

## (2)得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

ドゥーラサポートは、その効果が強力なエビデンスによって保証されている割に、費用や収入の問題、産科に非医療職のドゥーラが入りにくい状況、日本でのドゥーラの実例が少ないため関心はあっても導入を躊躇してしまうことなどが原因で、実社会で普及しにくい現状である。この解決策として、本研究の結果、ドゥーラを職業ではなく概念として広めることを強調するという結論に至った。これは海外及び国内で初めてこの概念を提唱した故 Dana Raphael 氏と故小林登氏の「誰でもドゥーラになれる」という考えに一貫し、コクランレビューなどのエビデンスも職業ドゥーラではなく概念としての出産付き添いについて効果が明らかで一般化が可能である。海外を見ても、ドゥーラが職業として普及する社会の現状を踏まえると、概念として強調し普及する方針は国際的にも新規性があり、無償のトレーニングにより「ドゥーラ的な人」が社会に増えやすくなることは支援の充実につながり、社会的意義が大きいと考える。

本研究で開発したトレーニングは、ドゥーラトレーニングの ロールプレイとは産科ケアの現場を「疑似演技」するもので、失敗しても妊産婦を傷つけることのない安全な場所で、妊産婦や家族、医療者など、それぞれの役になって演じ、演じた時の気持ちや行為の理由をふり返るものである。経験や知識を問わず誰でも参加でき、コストがかからない利点があるため、特にリソースの限られた途上国などへの適用も可能で、社会的な意義が大きいと考える。また、新型コロナウイルスの流行により院内感染予防のためリモート(ビデオ通話)による出産付き添い支援の必要性が高まり、付き添い者がリモート付き添いという新しいスキルを習得する際にもロールプレイを用いた方法の有用性について可能性が見いだされた。

## (3)今後の展望

本研究の成果物となるドゥーラトレーニングの内容は、無償で公開する。学術雑誌投稿や学会発表の他、本研究期間中に実施したトレーニングの報告は、ベネッセ次世代教育研究所チャイルドリサーチネット内「ドゥーラ研究室」の TRAINING 編にも公表する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 福澤利江子
2. 発表標題 助産師の役割と限界：妊産婦自身の力を引き出すために必要なこと
3. 学会等名 国際保健医療学会学術大会2019 学生部会（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

本研究期間中に実施したトレーニングの報告は、ベネッセ次世代教育研究所チャイルドリサーチネット内「ドゥーラ研究室」のTRAINING 編に公表
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----